

—こころのふるさと— 平安神宮 紅しだれコンサート2017



お庭は人のようだ。作庭当初は赤子であり、青年期を過ごし、50年経れば50歳となる。人がそうであるように、赤子と成人の姿はまるで異なる。それでも人となりは、仕草や雰囲気に見えるので不思議なものだ。お庭にも、人となりならぬ、「庭となり」があるようだ。

庭となり

小川勝章 作庭家

「庭となり」を気にする癖はいまだに抜けず、つい作庭当時に思いを馳せてしまう。作庭工程では、地面のレイアウトともいべき地割りをまず行うことで、起伏が生まれ、築山や池の姿となる。石組みや植栽は主要箇所や大きなものを優先し、お庭の要を景色作る。苔などでグランドカバーを行うのは仕上げの段階だ。

平安神宮御神苑は1895(明治28)年に造営され、高祖父(7代小川治兵衛)が作庭に携わらせていただいた。100歳をはるかに超えるお庭から受ける教えは多い。地割りを知らずとするあまり、頭の中で石や樹木のないお庭を想像する。池と池を川筋がつないでいる。水が御祭神のようにも映り、お社殿を守っているかのようにも映る。続いて想像上で石を据えていく。力がこもる石もあれば、動線を司る石もある。特に臥龍橋は御祭神のお姿そのものにも思え、また私たちが導いて下さっているかのようにも思える。

樹木について、とりわけ主要な松から植栽したことであろう。常緑樹の松は年中緑を湛え、お庭の骨格を形成する。日本では海沿いに黒松が、山間部に赤松が生育し、内外から松で守られているようでもある。その植生にのっとり平安神宮の松は植えられた、と父(11代小川治兵衛)は話す。神宮道や應天門には黒松、御神苑には赤松を主体として植えることで、御祭神をお守りしているというのだ。

そして、桜。落葉樹である桜は、四季を通じてその姿を変容させ、常緑樹に寄り添うことで互いを引き立て合う。開花期が2週間程だとすれば、咲いていない350日間がお庭における基本の姿といえよう。「さ」は殺物の神様、「くら」は神様がお座りになる場所を意味するとされる「さくら」は神様の依り代。特別な2週間には桜を通じ、神様とお出会いできるのかもしれない。

「平安神宮紅しだれコンサート」は特別な夜。ライトアップされた桜は、松をはじめとする常緑樹を背景に、厳かに浮かび上がる。水面にも映ることで、私たちは桜に包まれる。御祭神に見守られているかのよう。

作庭最終工程は、人の心にある。お庭での出来事は心の奥底にしまわれ、いつの日にか、ふとした折に蘇る。今年の桜と音楽も、大切にしまっておこう。御祭神にお出会いできることを願い、お庭のとなりで思いを馳せて。

写真=中田 昭 企画・制作=京都新聞COM

未来、咲く。 電池の革新。

GS YUASA



おかげさまで100周年。
私たちの使命は、人類の進歩を支え、
あらたな時代を切り拓き、お客様の笑顔を咲かせること。
GSユアサはこれからも、感謝と挑戦の心を胸に
進みつけてまいります。

100年 HISTORY, 200年 STORY.
ANNIVERSARY

GSユアサの前身である日本電池は2017年1月17日、
ユアサ コーポレーションは2018年4月13日にそれぞれ設立100年を迎えます。

株式会社 GSユアサ www.gs-yuasa.com/